

かも 市史だより

平成20年3月
No.17

◆編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

■ 伝 秋 房 公 夫 妻 像 ■



秋房に伝わる小さな男女の神像を紹介します。正確な像主は不詳ながら、加茂次郎源義綱に仕えた校野判官秋房公の自刻像という伝承を持っています。いずれも平安時代後期に活躍したとされ、加茂の歴史や伝説には欠かせない人物です。

一見して木目が現れるほど摩滅が著しく、風雨にさらされていた時期があったことが窺われます。男神像は衣冠束帯で笏を持つように手を取り、女神像は左足を立てています。立て膝は正座にくらべて行儀が悪いのではなく、中世では高貴な女性の座り方でしたから、むしろ正装の男女の像なのです。立て膝をする女神像は戦国時代の武将の妻とも解釈されるので、当時の武家の館に祀られていたと推測できます。所々に黒色が残っているのは下地で、本来は彩色していたことがわかります。

男神像の像高は三九センチ、女神像は三四センチで、大ぶりなお雛さまのようにみえますが、恐らく先祖神として祀られた神像なのです。制作は室町時代後期、十六世紀ですが、制作当初の安置場所は不明ですが、明治維新期に起こった廃仏毀釈により難を蒙り、以後転々と居場所を変えたとされています。

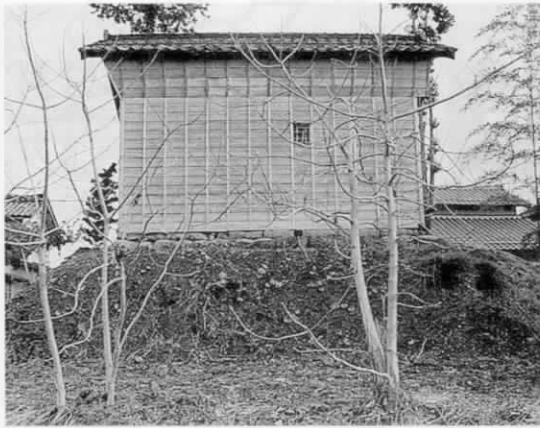
(文化財部会 川村知行)

濁流や溜水の冷害と共存 してきた農民 —その一例—

水害から穀物を守るため造られた低湿地の穀倉地域に点在する水倉の状況と、春の冷水に苦勞した加茂郷における谷地の農作業について紹介します。

水倉とは

水倉とは家が建っている屋敷の一角に、高い土盛りを築き、その上に建てた倉や土蔵のことです。稲作はたいいてい水の豊富な川の周辺を開墾し、壁全面に雨板を施している。



した地域が多く、長雨によりひとたび増水になると大変な被害を蒙ります。蓄えておいた穀物を流出することになるわけで、そのような災害から米や味噌などの食料を守るため考案されたのが水倉です。

土盛りの高さは地域と家によって異なります。洪水時、常に高い水位に見舞われる地域では、その時の水位に合わせたように、高い土盛りを築いたのです。また、堤防脇の家では土手の高さに合わせて土盛りをした家もあったようです。だから、加茂市には比較的大きな水倉も、高くて広い土盛りもあります。母家の建つ敷地面より低くて三尺、高ければ二間（約三六四cm）以上土盛りすることもあります。加茂川や下条川と合流する信濃川周辺に点在する、これら数点の水倉を紹介します。

間取りと構造

水倉はそのほとんどが厚い土壁の土蔵造りでたいいてい二階建てになっ



▶ 高さ約四・五尺の土盛りの上に建つ水倉。漆喰壁で、雨板の上部が剥き出しになっている。

ています。屋根の部分は勾配を付けた土壁仕上げで、屋根裏の内側からは太い棟木がみえ、棟木の上に厚い板を張り、外側を壁土で厚く塗り固めてあります。瓦葺き屋根が多くみられます。柱は二重になっており、内側の柱は室内からみえて約一尺五寸間隔に建っています。外側の柱は壁の中に入り、普通は外部からは確認できませんが、壁の破損部分や所有者の話から、埋め込まれた壁中の柱がおよそ三尺から三尺五寸間隔に建っていることが辛うじて確認できます。壁の厚さは八寸から一尺位ですが、これも家によって異なります。室内は土壁の表面に厚い板壁仕上げの造作になっています。

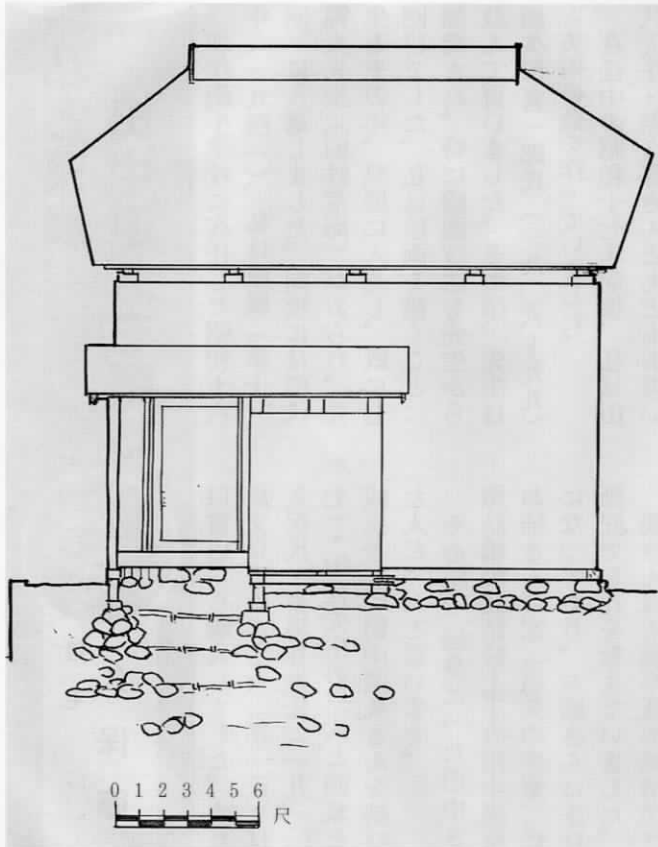


▶ 戦後しばらくは農協の倉庫に使用された水倉

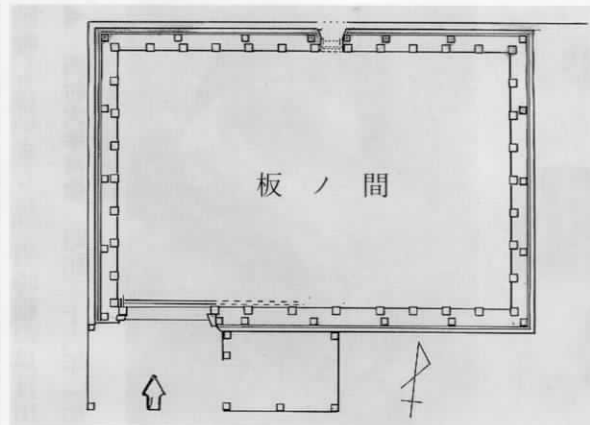
前側の入口部分はいいてい底造りになっており、焚き物や若干の大きな農具を保管しようです。室内は土間と板張りの二部屋が多いようですが、土間に板の間造りにした一部屋のみの事例もあります。また、板の間だけの部屋もあります。一階は米や味噌等の穀物を保管、高い土盛りの上に建っているため、洪水時の増水した濁流を防ぎ、水害から生活を守ってきたのです。二階は夜具や調理具等を保管、何日か生活できるように常備していたといえます。

ムロ造りの水倉

川西地区に古式の水倉が残っています。平家建ての土蔵壁造りで、屋根の部分の上部が平たい「ムロ」造



▲ 正面立面図 平屋の厚い土蔵壁のムロ造りで、屋根は寄棟兜造りの芽葺きである。



▲ 平面図 板敷きで壁は二重柱になり厚い土壁で仕上がっている。

りとなっています。寄棟萱葺き兜造りの屋根で、棟束がなく、棟木と又首や隅又首だけで釘類等の金物は使われておらず、すべて荒縄で括られています。屋根裏は外から梯子を使用、屋根裏の高い所で約六尺、棟束がないので作業がしやすく、兜造りの屋根なので風通しがよく、大根や葉を干したり、厚い壁土の上に直接芋類等を置き乾燥場を使用した時期もあったのです。

この水倉の特徴は平らな根太引き天井で、厚い土壁塗りと、木造平屋建ての「ムロ」造り、棟束のない寄棟兜造りに荒縄で括った芽葺き屋根と、自然石だけの基礎石組、低い床組になっている所です。現在は屋根も外壁もアタンが施されています。

加茂郷における谷地の農業

谷地田の農作業は、自然排水が悪く水との闘いでした。信濃川や加茂川の増水と雪解け等で水が引かず、春先には一面湖と化し、「青海神社の（春祭りの）太鼓の音を聞いて水が引く」といわれるほど排水が悪かったのです。だから、六月中旬頃までに田植えを終わらせるには大変な重労働であった訳です。

「田打ち」は、春まだ水がこない時、雪解け水とザエが張っている所へ素足で、田打ちをするので表現できないくらい冷たく痛かったものです。また「渡り木」といって脚を付けた四〜六尺位の厚手の板二枚を所々に置か、「かんじき」といって縦三〇センチ位、横四〇センチ位のやや厚めの板を縄か釘で固定し、その上に乗って打ち付け「へろたび」を履いての仕事だからなかなかほかどらなかつたようです。

田植えと田の草取り

苗は泥の中に植えるようなもので、後ろ向きに進む縄植えをするか、田打ちのできない所は残っている「かぶつ」の脇に植えたのです。田の草取りは稲の根がしっかりと張れず浮いた様な状態なので、片手で稲をつかみ、もう一方の手で稲の回りをかきまわして草取りをしたのです。

田植えや田の草取りは腰までつかりながらするので、何時の間にか「へ



▲ 大正5年竣工の加茂郷排水機場（新潟県立歴史博物館所蔵笹川コレクション）

「稲刈り」は、直接田に入って刈るか、水のある時は一人か二人で三半舟に乗って刈ります。いずれも刈った稲を舟の中に投げ込んで「つなぎまるけ」にして運び、ハザ場で一束一束まるけ直してハザ架けをしたのです。だから、一反歩の稲を刈るのに数日かかる時もありました。このように手間をかけた割には、収量は非常に少なかったのです。大正五年（一九一六）に石炭による蒸気機関の排水機が導入されましたが、思うように稼働せず苦労しました。

このように、たび重なる洪水と溜水の被害を受け過酷な重労働が昭和二十一〜二十三年頃まで続きました。

（民俗部会 五十嵐立幸・中山 勇）

私と県展、

田中道久を語る



猿毛
久保 徳雄

加茂南小学校に在任した昭和十六年（一九四一）、私は県展（第十一回）に入選しました。同校には田代純夫先生（旧姓荒海）がおられ、先生もその年、県展に入選し、既に七回目でした。私は絵画を描くことに触発され、特に絵画技法を先生から教えて貰いました。その頃、先生は船久保喜一郎氏（一九〇六〜九九）と美術の会を作っていました。

在任中の昭和十七年前後、私は田代先生・船久保さんともどもお互い勉強しました。当時絵の具は川
▲西村大串肖像 昭和二十六年（加茂養幼稚園所蔵）

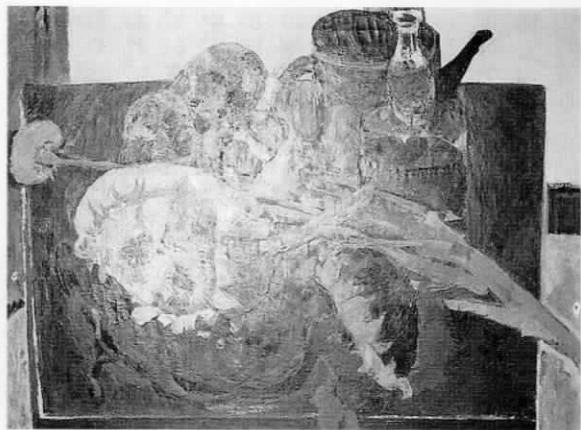


かも私史

口書店から購入しました。また、宮島文具店のご主人（孝一氏）は、船久保氏・番場春雄氏（一九一〇〜九七）・田代先生の三人と画家として成長著しい田中道久さんを結び付けた人だったと思います。

その頃、独身だった田中さんが、諏訪橋の北詰袂上手の田中煙草屋のお姉さんの家（道久の生家）に厄介になっており、お姉さんは生け花の師匠でお花を教えてくださいました。奥さんは近藤亨氏の姉清美さんで、

▲枯れた向日葵 第二十五回国画会出品、昭和二十六年（加茂農林高校所蔵）



※この頁掲載の三点はいずれも田中道久作

▲加茂川 第二十二回国画奨学賞受賞作、昭和二十四年（加茂市役所所蔵）

現在も九十歳で東京の自宅でお元気です。

日本軍が絵の募集をした時、田中さんも応募して、南方の密林を描いた絵を出品したようで、田中煙草屋にその絵が飾ってあったのを覚えて

画独特の線より面や色彩など画法の影響を受けたようだ。そう言えば、番場春雄さんの絵に葉書きより一寸大きい絵があるが、田中さんの絵と間違うほどタッチが似ています。

います。田中さんは始め三条中学校に入りその後間もなく、村松中学校に移り、そこを卒業して東京美術学校に入りました。とにかく小学校の頃から水彩画がうまかった。戦前の県展にも八回入選し、昭和九年第五回県展では特選になっている。今生きていれば九十三歳位でしょうか。番場春雄さん自身も、田中さんの洋

田中さんは戦後上京するまで、美術指導や展示など、南小学校の美術教育にも寄与しています。南小学校では児童の美術指導で講師をやっていました。当時の加茂高等女学校でも美術講師をしていたと思う。結構酒好きで、南小学校でもよくお礼などで宴会を開き、よく飲んだものでした。
(談、大正十年生)

加茂画壇の 黄金時代



湯沢町
桑原 孝

柏森義さんですか。立派な佇まいの方でしたよ。奥さんがきれいな人でしたね。

柏森さんは昭和十九年頃加茂へ疎開してきましたが、その前から父(甲太郎)は柏森さんと懇意でした。私はまだ子供でしたが、戦時中、正月にはカルタ会をするのが常でした。勿論百人一首です。子供も大人も一緒にになって、一組五〜六人が向かい



▲ 秋果静物 柏森義筆、昭和19年



▲ 渡辺ジュン肖像 柏森義筆、昭和23年

合って取り合います。まあ年中行事の一つですね。柏森さんは戦後東京へ戻られるまで毎年参加していました。すごく動作が大きくて、迫力がありました。渡辺ジュンという女医さんもこられていましたよ。町の名士でした。柏森さんが描かれた肖像画(写真)は、そういう交流があったのものだと思います。カルタ会のような催しはどこでも盛んだったと思います。テレビの普及でやらなくなりでしたね。

三条出身の日本画家、岩田正巳さん(一八九三〜一九八八)ともその頃の面識です。岩田さんも加茂に疎開していました。古川北華という方



▶ 東京の自宅で揮毫する古川北華(仲町 八百枝勝氏所蔵)



▶ つばき 真島元枝筆、制作年不詳

がいますね。父は北華さんを介して岩田さんと知り合ったのだと思います。疎開した人でも生活費が必要だったわけですね。父は絵が欲しい人へ紹介の労をとるなどして親しくなっていたようです。北華さんは美術評論家で、相当な力があつたらしいですね。権威ある美術雑誌へ番場春雄さんの作品を紹介するなど、努めて故郷の文化向上に尽くしたのでしょう。北華さんの存在や柏森さん、岩田さんが絵を描いたことでもかなり影響があつて、加茂の文化が華開いたような気がします。

真島元枝さんという人がいました。町立図書館に勤めていた五十嵐さんという人の縁で加茂へこられたようです。戦後は加茂中学校で美術を教えていました。いい絵を描いておら

れました。あの人も岩田さんなどと交流があつたのではないですか。地元の青年でも何人かは柏森さん・岩田さんについて学んでいましたね。

父の話では、あるとき絵描きの人たちが連れ立って加茂川の上流へスケッチに行ったそうです。柏森さんと父は魚釣りの名人で、ヒョット釣りあげると釣った魚を皿の上へ置くんです。そうすると、「生きた魚を描ける」とみんな喜んで描いたそうですよ。そんな風に同好の士が集まって技術研修をしていた時代があつたのです。その頃図書館で開かれる秋の展覧会で並べられるその人たちの絵をみに行くのが楽しみでした。

(談、昭和八年生)

田中道久 一九一五〜八一。加茂町生まれ。昭和九年東京美術学校入学。十三年国画会展へ初入選。戦中郷里へ疎開し、昭和三〇年再び上京。

柏森 義 一九〇一〜九二。本名政義。上条生まれ。十代で上京、昭和九年以後帝展へ毎年出品。昭和十九年から戦後の数年間郷里へ疎開。

古川北華 一八八三〜一九六二。加茂町出身の東洋美術評論家。南画家。書家としても知られる。戦争により疎開、郷里で没した。著述多数。

真島元枝 一九〇九〜九四。山形県出身、戦時中加茂へ疎開し戦後は加茂中学校へ奉職。のち上京し前田青邨門下となる。院展へ九度入選。

*この頁掲載の絵画三点はいずれも新潟市 渡辺健造氏所蔵

